アウグスチヌス "De Baptismo, contra Donatistas" に表われた洗礼論上の諸問題について (4)

石 橋 泰 助

第六章（第八）

『したがって，カルタゴに居るプリミアヌスがその司教である，或る程度中心的なドナートゥス派自身と私たちとの間には，すでにこの件について何の対立もないのである。すなわち，神はマクシミアヌス派を通してそれ〔見解の対立〕が終ることをお望みになり，彼ら〔ドナートゥス派〕が愛のすすめによっても〔認めようと〕欲しなかったことを彼〔マクシミアヌス〕の例に強いられて認めるようになさったのである。しかし，ここでさらに私たちは，彼ら〔プリミアヌス派〕と交わっていない人々，すなわち数が少ないほどより誠実なドナートゥス派が自分たちのもとに残ったのだと主張している人々が，まだ自分たちに何か云い分があると思うことがないように論じ続けよう。もしその人々がマクシミアヌス派だけであったならば，私たちは彼ら自身の救いを軽視するはずはなかったであろう。だから同じドナートゥスのグループが沢山のごく小さい分派へと寸断され，そのすべての小さな部分がプリミアヌスの居るひとつのより大きな〔グループ〕をマクシミアヌス派の洗礼を受け入れたことについて非難し，そして各分派が真の洗礼は他のところには全く存在せず，カトリック教会の広がっている全世界にも，ドナートゥスのより大きなグループの中にも，最も小さい分派の中のひとつである自派以外のどの〔派の〕中にも存在せず，ただ自分のところにだけ残っているのだと努めて主張しているのであるから，ましてどれほど〔私たちは

そう考えるべきであろうか〕。[1] それらのすべての分派が，もし人間の声ではなく，最も明らかな真理そのものの声を聞き，かつ自分の倒錯性の激越な精神に打ち勝つことを欲するならば，とにかく彼らは自分たちがそこから分割された〔それ自体〕分割されているより大きなドナートゥス派へではなく，むしろカトリック的根源の活力そのものへと自分固有の不毛さから回心するであろう。[2] たしかに，すべての人は私たちに反対していないところでは私たちのために居るのであり，私たちと一諸に集めないところでは散らしているのである。』[3]

本章はその内容からみて，前節の論旨から導き出される短かい結論的な記述と，ドナートゥス派の主流であるプリミアヌス派以外の小分派に対する新たな攻撃を開始している部分とに二分することができる。[4]

1. アウグスチヌスは前節に於て，(1)ドナートゥス派自体の内部分裂と和解のいきさつを示し，(2)その際プリミアヌス派が分裂中のマクシミアヌス派で受洗した人々をそのまま受け入れたことによって事実上自派以外の洗礼の有効性を認めたことになると論じ，(3)ドナートゥス派の実践がアウグスチヌスの主張するカトリック教会の教えと合致していることを述べ，(4)ドナートゥス派も洗礼の有効性と有益性とに関するアウグスチヌスの主張を否定することができず，したがってアウグスチヌスの考え方の正当性が立証された，と論述している。本章のこの部分では，その論旨を受けて，ドナートゥス派の主流であるプリミアヌス派とカトリック教会との間には「何の対立もなくなった」と述べている。しかし，理論上の対立が解消したのでないことは，これまでのドナートゥス派に対する激しい論駁からみて明らかであり，この記述はドナートゥス派が前節の論法にもとづいて当然アウグスチヌスの考え方に賛成しなければならず，その限りにおいて理論上の対立もすでに終ったのである，というアウグスチヌスの勝利宣言のことばと解することができよう。しかも，アウグスチヌスの理論的勝

利がまさにドナートゥス派自身の行動によってもたらされたので，これを神の摂理的な業とみなすことによって，自らの主張の正当性を確信しかつ人々に強く印象づける効果を生じていることが（アウグスチヌス自身の意図はともかくとして）指摘されるであろう。

2. アウグスチヌスは一転してドナートゥス派の主流であるプリミアヌス派から分離してさらにより小さなグループへと分裂しながら相互に非難し合い自己の正当性を主張し続けている極小分派へと攻撃の矛先を向ける。彼は，この各小分派もみなドナートゥス派の性質を色濃く備えていて，彼らがかってドナートゥス派がカトリック教会を非難したその同じ非難のことばを彼らより大きいグループに向けていることを，半ば揶揄的口調で「教が少ないほどより誠実なドナートゥス派が自分たちのもとに残ったのだと主張している人々」と述べている。すなわち，各小分派の論法に従えば，彼らは自分たちの洗礼のみが正しいと主張しながら，さらに小分派へと分裂して行くことによって，遂には真の洗礼を保有している者がほとんど居なくなってしまうという結果になるであろう。アウグスチヌスは，それが聖書に示された真理に全く相反していることを前提として，彼らのこの自己撞着を鋭く衝きながらその倒錯性（perversitas）を示して行く。そして，もし彼らがこの倒錯性から立ち直りたいならば，それは彼らがまさに彼らをこの倒錯的矛盾へと陥らせた原因を蔵しているドナートゥス派へ戻ることによってでなく，根本的にこのような矛盾を排しているカトリック教会へ戻ることによってのみ可能であることを強く主張している。この意味でアウグスチヌスはカトリック教会を「カトリック的根源の活力そのもの（ipsa viriditas radicis catholicae）」と呼んだのである。

本章の最後で，アウグスチヌスは「すべての人は私たちに反対していないところでは私たちのために居るのであり，私たちと一諸に集めないところでは散らしているのである」[5] と述べているが，この一文は以上の論議のしめくゝりであると同時に，次章以下に展開される聖書にもとづく論議

の発端となっている。この一文は福音書のことばにもとづいているが，そのまゝの引用ではなく，前半はマルコ 9,40（ルカ 9,50）から，後半はマタイ 12,30（ルカ 11,23）から取っており，前半は vos, vobis を nos, nobis に，後半は mecum を nobiscum にそれぞれ変えて用いている。[6] アウグスチヌスは次章で両方の福音の箇所を別々に引用しているので，上記の変形と合成を意図的に行なったことは明らかである。すなわち，マルコ 9,40に由来する前半とマタイ 12,30に由来する後半とは，内容的には一致しないどころか矛盾さえしているのであるが，それをドナートゥス派の各小分派に当てはめてみると彼らのうちに内包している矛盾点を明白に指摘することができ，彼らのカトリック教会に対する関係をよく表わすことができるので，アウグスチヌスはこのような変形合成文を用いたのである。このことについての詳細は，次章以下で論じられるので，こゝでは以上の事柄を指摘することだけにとゞめておきたい。

本章には，洗礼論上考察すべき特別重要な事柄は述べられていないので，以上で本章の考察を終ることとする。

第七章（第九）

『それで，もう私は人間的な論証によってそうするとは考えないように〔したい〕，というのは，この問題の不明瞭さは，ドナートゥスの分派以前，教会のより早い時代に偉大な人々および愛を備えた教父たち，司教たちが平和を損なうことなく互いに議論しかつ質疑し合うようにさせ，ついに全地の完全な会議によって最も健全であると思われる事柄が種々の疑問を遠去けて確立されるまで，長い間各地方での会議の様々な決議が揺れ動いたほどだからである。[7] 私は福音から確かな証拠を引き出し，それによってどの分派や異端に於ても引き裂かれたその傷を教会の薬が癒すのであること，だがそれは健全のまゝ残っているであろう事柄が否認されて損なわれるよりも，むしろ賛同されて承認されるのであること，そのためにどれほど正しくまた真実に神に従って決定したか，

ということを私は主の御助けによって証明するのである。主は福音の中で「私と共に居ない者は私に反対しているのであり，私と共に集めない者は散らしているのである」とはっきり述べておられる。しかし弟子たちが，自分はある人が彼〔キリスト〕の名前でデモンを追い出そうとしているのを見て，〔その人が〕自分たちと共に彼〔キリスト〕に従っていなかったので〔悪魔祓いを〕禁じた，と彼〔キリスト〕のところへ報告したとき，彼〔キリスト〕は「禁じてはならない。あなたがたに反対していない者はあなたがたのために居る。なぜなら私の名で何かをする者は誰でも私について悪く話すことはできないからである」と云われた。もし彼の中に正すべきことが何もなかったならば，教会の交わりの外に立っていて，キリスト教社会から分たれたものでありながらキリストのみ名で集める人は誰でも安全であり，それゆえもちろん「私と共に居ない者は私に反対しているのであり，私と共に集めない者は散らしているのである」ということは誤りであろう。しかし，もし主の弟子たちが無知によって行なおうと欲した事が，主が「禁じてはならない」と云われた事に於て正されるべきであるならば，なぜ〔主〕御自身はこの事が禁じられるのを禁じたのであろうか。[8] なぜなら，彼がキリストのみ名によって治療を行なっていたとき，彼はこの行為に於て彼ら〔弟子たち〕に反対したのではなく彼らに味方したのだからである。したがって，「私と共に居ない者は私に反対しているのであり，私と共に集めない者は散らしているのである」という宣言と，「禁じてはならない。なぜならあなたがたに反対していない者はあなたがたのために居るのだから」という宣言とが両方とも真実なのであり，そのように〔両方とも〕真実であるためにはつぎの事が理解されるべきであるという以外何があろう。すなわち，彼はこれほどの〔偉大な〕み名への尊敬のうちに——そこでは彼は教会に反対していたのではなく教会のために居たのである——強められるはずであったのに，あの分裂によって——そこでは彼は集めたとしても散らしていたのである——咎められなければならず，た

とえひょっとして[9] 彼が教会へやって来たとしても，彼が持っていたものをそこで受けるのではなく，彼が誤っていた事柄について正すようにすべきなのである。』[10]

本章もまた二つに分けて考察するのが妥当である。すなわち，1. こゝで論じる問題の歴史的経緯を指摘する短かい導入部分と，[11] 2. 福音の中から二つの主のみことばをドナートゥス派の各分派に当てはめて解釈している部分とである。[12]

1. アウグスチヌスはこゝで「ドナートゥスの分派以前」の経緯に簡単にふれている。こゝで述べられていることは，いわばドナートゥス派離教前史とでも云うべき内容を示しており，本書の第2巻でかなり詳しく述べられるのであるが，本文理解のために概略を今記しておきたいと思う。ドナートゥス派の離教が起ったいきさつについては，すでに本論文の第一章（第一）の1以下で概括した。[13] その中でもふれたように，ドナートゥス派はチプリアヌスの教えを自分たちの論拠としたのであるが，アウグスチヌスは，チプリアヌスの教えそのものがドナートゥス派の立場を否定していることになる，ということを主張しているのである。「この問題の不明瞭さ（quaestionis huius obscuritas）」，すなわち離教受洗者の再洗礼の可否についての問題は，迫害による棄教的行為者の教会復帰をどう扱かうかという問題と絡んで，すでにチプリアヌス以前から司教たちを悩ませたのである。「長い間各地方での会議の様々な決議が揺れ動い」たのはすでにチプリアヌスの前任者アグリッピヌス（Agrippinus）[14]の時からであり，彼は 215年[15]カルタゴでアフリカおよびヌミディアから70人の司教を招集して会議を開き，異端者のもとで受洗した者が教会に復帰した場合もう一度洗礼を受ける必要のあることを示した。[16] チプリアヌスがカルタゴの司教となってから（248/9年），皇帝デチウス（Decius, 在位 249—251年）による迫害がひどくなり，多くの殉教者を出したがまた多くの棄教行為者を

も出し，その中には聖職階級の者も居た。[17] 迫害がやゝ下火になったとき，チプリアヌスは棄教行為後教会に復帰してきた人々の取扱かいについて協議するため，カルタゴに司教を招集し教会会議を開いた（251年）。[18] そこでは棄教行為をした人々が，もとの異教徒に戻ってしまうことがないよう和解への道を残すべきであるが，他方簡単に復帰を許すべきでもなく，長い償いを科さなければならないことを決定した。[19] チプリアヌスはこの決定をローマの司教コルネリウス（Cornelius, 在位251—253年）に報告し，コルネリウスも会議を招集して同じ決定を行なった。[20] デチウス帝の死後，暫くは平穏であったが，ヴァレリアヌス（Varelianus, 在位 253—260年）が帝位につくと再び激しい迫害が開始された。コルネリウスは殉教し，ステファヌス（Stephanus Ⅰ, 在位 254—257年）がローマの司教となった。この頃から異端者の洗礼の有効性の問題が再燃し，アフリカの教会の統一見解を決定するため，256年にカルタゴで87人の司教が集まって教会会議を開き，異端から復帰する場合は再洗礼が必要であることを，アグリッピヌスの時代の決定にもとづいて再確認した。[21] チプリアヌスはこの決定をステファヌスに知らせたが，[22] ステファヌスはそれが教会の古来の伝統に反するから復帰者に按手だけを行なって教会に受け入れなければならないと主張し，両者の見解の相違が表面化した。[23] ステファヌスはアフリカの司教たちに同調している小アジアの司教たちにも，異端からの復帰者への再授洗を禁止した。[24] チプリアヌスはこの問題についてローマと見解を異にしたまゝ，激しくなった迫害の嵐の中で258年に殉教した。彼は好んでローマと対立したわけではなく，つねに教会の一致を強調し，いつか全教会の会議が開かれるのを待望してもいたのであるから，ローマと見解を異にしたまゝ死を迎えたことは非常に不本意なことであったにちがいない。[25] この間の事情をアウグスチヌスは「偉大な人々および愛を備えた教父たち，司教たちが平和を損なうことなく互いに討論しかつ質疑し合うように」したと述べて，同じ問題についてドナートゥス派が示した態度といかに異なったものであったかを強調したのである。「ついに全地の完全な

会議によって最も健全であると思われる事柄が，種々の疑いを遠去けて確立される」と述べられた全教会会議(plenarium totius orbis concilium)は325年のニカイア公会議（Concilium Nicaenum）を指していると考えられるが，たゞニカイア公会議がドナートゥス派の決定的な分離のあとに開かれていることを考えると，この問題についてカトリック教会の立場を明白に決定した314年のアルル（Arles）の教会会議を指しているとも考えられる。[26] アルルの教会会議は，異端者の洗礼についてつぎのように決定した。「再授洗するという自分たち固有の法を用いているアフリカ人達について，もしある人が異端から〔カトリック〕教会へやって来るならば，彼に信条（symbolum）を尋ね，もし彼が父と子と聖霊へと受洗したことが分ったなら，聖霊を受けるために彼に按手するだけにし，もし彼が質問されてこの三位一体を答えないならば受洗するように，と決定した。」[27] またニカイア公会議の決定はつぎの通りである。「自らカタリ派（清浄派）と名乗る者達〔すなわち，ノヴァチアヌス派〕について，もし彼らがいつかカトリック教会へとやって来るならば，按手を受けて聖職に留まるようにと聖なる偉大な会議は決定した。……カトリック教会へと避難して来るパウルス派の者たちについては，規定はいかなる場合でも受洗するようにと公示した。ところでもし過去に聖職にあった者たちについてであるなら，彼らが過ちなく申し分のないことが分ったならば，カトリック教会の司教から受洗して叙階されるように。」[28] いずれにしろ，アウグスチヌスはこの会議[29]の決定をドナートゥス派論駁の論拠として本書の第2巻全体にわたって記述し，またいくつかのドナートゥス派論駁書の中で引用し，その権威を自らの主張の正当性の根拠としているのである。[30] 再洗礼の可否に関するチプリアヌスの見解と，それに対するアウグスチヌスの解釈ないし批判は本書第2巻を考察するときに詳しく述べることとする。

2. アウグスチヌスはドナートゥス派の各小分派の誤謬についての歴史的根拠を指摘したあとで，福音のみことばを彼らに当てはめながら，彼ら

の誤りを更に明白にして行く。アウグスチヌスはまずマタイ 12,30（ルカ 11,23）とマルコ 9,39・40を引用する。[31] ドナートゥス派は，カトリックに反対しているかぎりでは，「私と共に居ない者」（マタイ）と見なされるべきであるが，キリストを信じキリストのみことばを宣べ伝えようとしているかぎりに於ては，「私の名で何かをする者」（マルコ）である。したがって，カトリックとの対立点を離れて見るならば，ドナートゥス派を「私と共に居ない者」として斥けるこは，マルコ 9,39・40の主のみことばに反することになる。それではドナートゥス派をどちらのみことばに従って判断したらよいか，という疑問が生ずる。アウグスチヌスはこゝで，キリストのみことばは両方とも真実でなければならないから，どちらか一方に従ってドナートゥス派を判断するのではなく，両方ともドナートゥス派に於て実現しているものと理解しなけれならないと主張している。しかし，こゝには理論の飛躍があるのは明らかである。すなわち，福音のみことばがすべて真実(vera)である，という信仰上の原理と，この二つのみことばがドナートゥス派に於て実現している，という断定との間には論理上必然的な帰結性は何もないからである。これは，ドナートゥス派の立場がこの二つのみことばに関連づけて説明されると一層明確になって来るという修辞法的要求にもとづいた論法であり，それを福音の真理性と意図的に結合することによってより大きな効果，すなわち読者がドナートゥス派の誤りは福音のみことばによって証明されたと判断するような効果を生じていることは否定できない。事実アウグスチヌスは，「私は福音から確かな証拠を引き出し，それによって」ドナートゥス派がいかに誤っているかを「主の御助けによって証明するのである」と述べて，福音のみことばを使用する意図を自ら明らかにしているのである。たゞし，彼がドナートゥス派に対して，相互にくい違っている福音のこの二箇所を当てはめたのは，おそらく一方ではマタイ 12,30に従ってドナートゥス派を単的に非難する者が居り，他方ではマルコ 9,39・40にもとづいてドナートゥス派を弁護する者が居たので，この両方ともドナートゥス派に当てはまることを示そうと

したためと推定することもできる。なぜならアウグスチヌスは「もし彼の中に正すべきことが何もなかったならば」彼らに対して「『私と共に居ない者は私に反対しているのである』ということは誤りであろう。しかし……なぜ〔主〕御自身はこの事が禁じられるのを禁じられたのであろうか」と述べて，ある人に対する反論を行なおうとしているように見られるからである。しかし，このことはアウグスチヌスの他のドナートゥス派駁論書やその他の関連文献から立証されなければ単なる推定の域を出ないことはもちろんである。

アウグスチヌスはドナートゥス派を全面的に誤謬として非難するのではなく，正しい点と誤っている点とを分けて論じ，正しい点については「私の名で何かをする者」として受け入れ，誤っている点についてだけ「私と共に居ない者」として斥けるべきであると主張する。すなわち，アウグスチヌスは，ドナートゥス派が「健全のまゝ残っているであろう事柄」を有しており，それゆえに「賛同され承認され」かつ「これほどのみ名への尊敬のうちに」居る，という点に於て「教会に反対していたのではなく教会のためにに居たのである」と見なす。しかしアウグスチヌスは，ドナートゥス派が「正すべきこと」を改めずに「あの分裂によって(illa separatione)」「引き裂かれた傷」を有しているという点に於て「集めたとしても散らしている」ので非難されるべきであると断罪する。このようにしてアウグスチヌスは，ドナートゥス派が犯している最も非難されるべき不正は異端者の再洗礼に関する見解の誤りにあるのではなく，全教会の決定に従わずに分派行動をとったまさにその反逆性にあることを厳密に指摘したのである。すなわち，意見の相違や誤りはドナートゥスの分派以前にもあったのであるが，そこにはまだ分派行動はみられず，自己の意見の正当性を主張するにしても，むしろつねに全教会の一致と平和を考慮に入れる姿勢があったのである。このことはドナートゥス派が自己の正当性の論拠としているチプリアヌスの考え方を正確に理解すれば，却ってドナートゥス派自身がとった分派行動こそチプリアヌスの根本的な考え方に反するものとなること

が明らかとなる，とアウグチヌスは考えており，次巻以下で詳しくこの点を取り上げて行くのである。このように，ドナートゥス派の誤りの本質を分裂という点に絞って考えることによって，その各小分派の誤りが一層鮮明となっ来るのである。

アウグスチヌスは，ある人がドナートゥス派からカトリック教会へ帰正する場合（たゞしこれはほとんどあり得ないことと考えているので「もしかしてやって来るならば (si forte veniret)」という表現を用いている），「自分の持っていたものをそこで受けるのではなく，誤っていた事柄について正すようにすべきである」という従前の主張をくり返している。上記の「彼が持っているもの」とは直接には洗礼を意味するが，こゝではより広くキリスト教信仰全般をも意味すると考えられよう。また「誤っていた事柄」とは，誤りの最大点である分裂が帰正そのものによってすでに解消されてしまうので，あとは異端者の再授洗の必要性を主張する誤りのみとなり，これをカトリック教会の決定に従って改めるならばそれで十分であると述べる。このようにして，アウグスチヌスは，カトリック教会のとっている立場が，ドナートゥス派に対してもいかに寛大に働くものであるかを示すことによって，教会の決定の優位性を改めて強く打ち出しているのである。この論点は次章以下で更に展開されて行く。

註

1. 原文は "Quanto ergo magis, quia……" となっており，この部分の意味は詳かではないが NPNF の英訳は "How much more, then, are we bound to consider it, when……" となっており，これに従って訳出した。
2. CSEL のテキストは "revertentur" となっているが，"reverterentur" という読み方のあることも示している。utque を et uti と解して reverterentur と合わせると，「回心することになるはずである」の意味を生じ，文脈により合致するように思われるが，AOO のテキストも revertentur を採っている。
3. "De Baptismo, ctr Donatistas" lib.1, cap.6, n. 8 (AOO 9, 164 s).
4. はじめより，"……exemplo suo cogente fateantur. (……彼の例に強いられて認めるようになさったのである。)" までと，以下終りまでの部分。

5. "Omnes quippe isti ubi contra nos non sunt, pro nobis sunt: ubi autem nobiscum non colligunt, spargunt."

6. AOO も CSEL も，この一文の関連箇所としてマタイ 12, 30のみを註に挙げている。たしかに全体をマタイ 12, 30の変形として，すなわち1人称単数を1人称複数にし，前半の否定文を肯定文に変えたものとして解釈することができるかもしれない。しかし次章以下で展開される議論はマタイ 12, 30とマルコ 9, 39・40とを別々に引用した上で，この両方の文章が一見矛盾しているようであっても福音のみことばであるから両方とも真実でなければならず，これをドナートゥス小分派に当てはめることによって，たしかに両方とも彼らに於て実現している，という点に向けられている。また後に本巻の第八章（第十一）で，この文章が再び結論的な形で用いられるので，アウグスチヌスが一見意味の合わない福音の二箇所のテキストを意図的に結合したと解する方が妥当であろう。

7. この事は第二巻第九章で詳しく述べられる。

8. "Si autem quod discipuli Domini per ignorantiam facere voluerunt, id in eo corrigendum est; quod dixit Dominus, Nolite prohibere: cur hoc ipse prohiberi prohibuit?" NPNF の英訳は "But if he required correction in the point where the disciples in their ignorance were anxious to check him, why did our Lord, by saying, 'Forbid him not,' prevent this check from being given?" となっている。この場合，hoc は奪格とされ quod (dixit) の先行詞と解されている。構文上は分りやすい解釈であるが，prohiberi の意味上の目的語は不明確となり，全体の意味が分りにくくなってしまう。quod (discipuli) の先行詞を id とし，quod (dixit) の先行詞を (in) eo とし，hoc を対格で prohiberi の意味上の目的語（文法上は主語）と取るならば，構文上は複雑となるが，意味はより明確となり，文脈にもより適合するので，この解釈のもとに本文のように訳出した。なおこの場合，hoc は id corrigendum est を受け，文脈から弟子たちがマタイ 12, 30の意味で「私と共に居ない者」としてある人の祓魔行為を禁止しようとしたことを，キリストが「禁じないように」と正されたことを意味する。

9. "et si forte veniret ad Ecclesiam,....." CSEL のテキストは "ut si forte....." となっている。この場合 ut 以下の文章は culpandus (est) に接続すると考えられ「彼はあの分裂によって……もしかして教会へやって来たとしても，彼が持っていたものをそこで受けるようにとではなく，彼が誤っていた事柄について正すように咎められるべきである」という意味に解される。この方が以下の接続法の意味がよく出て来るが，構文上多少無理な形になる。NPNF の英訳は AOO のテキストに従っている。

10. "De Baptismo, ctr Donatistas" lib.1, cap. 7, n. 9 (AOO 9, 165s)
11. はじめより，".....etiam remotis dubitationibus, firmaretur: (……決議が揺れ動いたほどだからである。)" まで。
12. 以下終りまで。
13. 「南山神学」第2号(1979年) 3頁以下。
14. アグリッピヌスはチプリアヌスのおそらく二代前のカルタゴ司教であった。Cf. NPNF Ⅰ, 4, p. 430, note 4.
15. 開催年については215—7年または186—7年とする説がある。Cf. ibid., p. 431, note 3.
16. Cf. ibid.: Cyprianus Ep. 71 ad Quintum, 4; Ep. 73 ad Iubaianum, 3; De Baptismo, ctr Donatistas, 2, 9, 14.
17. Cf. Cyprianus, Ep.52 adAntonianum, 11.
18. Cf. ibid., 6; 熊谷賢二訳「偉大なる忍耐，書簡抄」創文社，1965年，158頁，注(47)。
19. Cf. ibid.; 熊谷賢二訳同上書81頁以下。
20. Cf. ibid; 同上書82頁。しかし，同書簡の5で引用されているローマからの返書(Cyprianus, Ep. 10) にある「平和な日が来るのを待って開く会議」としてコルネリウスが招集したものであるかどうかは不明である。
21. Cf. De Baptismo, 2, 9, 14; Cyprianus, Ep. 71; Ep.73; NPNF Ⅰ, 4, 425, note 2.
22. Cf. Cyprianus, Ep. 72 ad Stephanum.
23. Cf. id., Ep. 74 ad Pompeium; DS 110.
24. Cf. id., Ep. 75 a Firmiliano ad Cyprianum; DS 111.
25. Cf. id., Ep. 52; De Baptismo, 2, 9, 13: 14.
26. Cf. NPNF I,4,431, note 7.
27. Concilium Arelatense I, can. 9 (8); CSEL 26, 208; DS 123.
28. Concilium Nicaenum, can. 8: 19; PL 56, 828; DS 127: 128.
29. アウグスチヌスが述べた「全地の完全な会議」がニカイア公会議を指すかアルルの教会会議を指すか，という問題については別の機会に考察することとする。
30. Cf. Contra Parmenianum, 2, 13, 30; De haeresibus, 69; Ep. 43, 7, 19.
31. アウグスチヌスの引用したマタイ 12, 30 (ルカ 11, 23) のテキストはほゞヴルガータ訳のテキストに一致しているが，マルコ 9, 39・40のテキストはかなり異なっている。すなわち，ヴルガータ訳は "Nolite prohibere eum; nemo est enim qui faciat virtutem in nomine meo et possit cito male loqui de me. Qui enim non est adversum vos, pro vobis est." となっているが，アウグスチヌスは句の順序が異なる "Nolite prohibere. Qui contra vos non est, pro

vobis est. Non potest enim quisquam in meo nomine facere aliquid, et male lcqui de me." というテキストを用いている。ヴルガータ訳はギリシャ語テキストとほゞ一致している。なおヴルガータ訳ではこのテキストはマルコ 9,38・39となっており，AOO も CSEL も脚注でこの節数を記している。

Concerning Problems of the Theology of Baptism Found in St. Augustine's "de Baptismo, Contra Donatistas" (4)

Taisuke ISHIBASHI

In this treatise, two sections of St. Augustine's "De Baptismo, contra Donatistas", that is Number 8 (Chapter 6) and Number 9 (Chapter 7) of Book 1, are treated.

We may divide Section 8 (Chapter 6) into two parts, namely the first part, in which a short conclusion of the former section (Number 7) is shown, and the second part, in which St. Augustine begins a new criticism against smaller Donatist groups except for Primian's sect, the principal sect of the Donatists.

Section 9 (Chapter 7) may also be divided into two parts. In the first part, St. Augustine works out a short historical summary of the problem, which he treats in this book. In the second part, he quotes two phrases from the gospel and applies them to indicate the error of Donatist groups.

While there is no important description concerning problems of the theology of baptism in these sections, we consider relations between these sections and other works of St. Augustine, and make efforts to explain rather strictly the historical progress prior to the Donatist schism, especially that of the period of St. Cyprian.